

ろんだん
佐賀



岩永 雅也さん

放送大学長

いわなが・まさや 1953年嬉野町生まれ。就学前に千葉転居。筑波大附属高—東京大卒—同大学院修了。大阪大、放送教育開発センターを経て2000年に放送大学教授、21年から放送大学長。専門は教育社会学。チョウ、馬、自転車、農作業など趣味は雑多。千葉市。

先月の本欄の最後に、青年団の父にして社会教育の先駆者、田澤義輔に触れた。田澤の生涯の友であった「次郎物語」の作者下村湖人(下村も田澤と並んで佐賀市中央通りの25体の傑物像に加わっている)によれば、田澤は何よりも「毅然たる清節」の人であったという(下村湖人「この人を見よ」冒頭)。「清節」は令和の昨今耳慣れない言葉であるが、『広辞苑』(第7版)には「汚れない節操」と書かれている。それでは「節操」は…と引くと、「信念をかたく守って変えないこと」とある。要するに、下村は田澤を、澄んだ信念を持ってその通りの生き方を貫いた高潔な人物だと評したのである。

ところで、清節の佐賀人ならば、田澤以外にももうひとり挙げることができ

清節の人

節操と社会・他者との狭間で

る。今話題のNHK朝の連続テレビ小説「虎に翼」に登場した主人公猪爪寅子の初恋の相手花岡悟である。花岡の実在のモデルは、白石町出身で旧制鹿島中から旧制佐賀高、京都帝大を出て高等文官試験に合格し判事(裁判官)となった山口良忠と目される(脚本の吉代、東京民事地方裁判所に就いて食糧管理法違反者の事実を多く担当した。その職務柄、「闇米を取り締まる立場の者が闇米を食べるわけにはいかない」という信念を貫いて闇物資を徹底して拒否し、配給食糧のみで生活したために栄養失調と肺浸潤(肺結核)を患い、ことを父から初めて聞かされた。もちろんその信念と死についての深い理解はかなわなかったが、人並み外れた「正義」そして「信念」のようなものは子ども心に感じる事ができた。そのことを幼い私に訓するつもりで父はそのエピソードを語ったのだと思った。しかし、今ではその時の真意を改めて確かめる術もないが、この年になって、「何とか生き抜くというのも一つの考え方もない」と思うようになった。確かに信念はそれ自体美しい。それを貫くことには反対したくともできないように思える。ただ、それを人々の生き方の手本、規範とするのは少し違う。逆に、正義や信念に駆られた行動の怖さもある。「人は正義の名のもとにどこまでも残酷になる」のである。山口は、まさに正義の名のもと、自分自身の肉体に対して限りなく残酷になっていたのだと思う。いたわしいことである。

田恵里香さん、違っていたらごめんさい)。ドラマ中の花岡は、健康的でスマートで順風満帆な佐賀生まれの青年法律家として描かれていたが、モデルとなったと思われる山口の生きざまは、まさに「壮絶」そのものであった。

戦時下で判事となった山口は、終戦後の食糧難の時

終戦から2年後の1947年10月に33歳の若さで夭折している。当時、新聞はその死を「餓死」と報じた。山口の生き方は、節操に関して究極のケースだったと言っつてよいかもしれない。

私は、小学一年生のころ、きつかけは記憶にないが、郷土の山口判事とその死の

し、そのとき父は山口に対して「ばかな生き方だ」と酷評したうえで、「人間、死んだら負けだ、生きていく者が勝ちだ」と結論付けたのである。まさかそうした評価を父の口から聞くと、は思わなかった私は、ひたすら驚いたことを今でも鮮明に覚えている。

その父も6年前に齡93

